

◎シリーズ 長岡京歴史散歩

⑪⑫

長岡京の洪水跡

「二条大路の調査から」

二条大路は長岡宮の南に接する重要な道路で、朱雀大路に次ぐ規模（想定道路幅30m）をもっています。今里更ノ町の調査では、水田下40cmほどのところで、その二条大路の南側溝が検出されました。

調査したところは、現在の小畑川から100mほど南に離れたところの氾濫原で、このあたりでは、数度にわたる洪水堆積層が確認されています。



▲二条大路西側溝とその埋土

二条大路の南側溝は、砂礫層などで埋まり、2回掘りなおされていました。大路の南側では、さらに面的に砂礫層に覆われており、その砂礫層を掘り込んだ溝も砂礫層でさらに埋まっているという状況でした。これらの洪水層は大きいものでこぶし大の礫も含んでおり、流れの速さを物語っています。また長岡京期の遺物も多く出土しており、確実に長岡京時代の洪水であることがわかります。

『日本紀略』には、延暦11年（792年）に6月と8月の2回大雨が降り、宮城の門が倒れたり、桂川などがあふれたりしたことが書かれています。そして翌年正月に最初の平安京視察が行われていることから、洪水の被害が相当にひどく、長岡京廃都を決断させる要因の一つになったとも考えられています。

今回の調査で確認された洪水層が、この時のものであるかどうかは断定できません。しかし、当地一体が小畑川の氾濫によって数度にわたって土砂に埋もれたことは確実であり、文献にてらすと、長岡京の10年間の中では延暦11年しかないことになりません。さらに興味深いのは、長岡京造営に伴って上流域の樹木を大量伐採したために、土地が保水力を失い、洪水の被害が大きくなったとする見方があることです。

現在長岡京市内の竹藪は年々減少しています。自然は環境に応じた現象を起し、時として都をも動かすほどの力を持っていることを、地面に刻み込まれた歴史は語りかけているのです。